

連載：魂の中小企業

(魂の中小企業) 吾輩はギターである(前編)

2014年8月19日 22時00分



主人の和泉康夫さん。奏でているのが吾輩である＝大阪市鶴見区の新日本テック



従業員のみなさんと、吾輩の主人(左から2人目)。手にもっているような部品をつくっている



吾輩の主人は、「寿司屋型ものづくり」をめざしているとか。意味は後編で

吾輩(わがはい)はギターである。名前はまだ無い、あるわけない。

どこで生まれたか、否、つくられたか、おおよその見当はついていない。某有名楽器メーカーの工場で、ニャーニャー泣いていた、もとい、ポロンポロンと弦を鳴らしていた、と記憶している。

吾輩は、ここではじめて、人間というものを見た。それは、ギターづくりの職人という指折りの熱い種族であった。

そして、吾輩は楽器店にならび、別の人間に買われていった。その人間は、吾輩にある6本の弦で、いろいろ音を出し、音楽といわれるものをした。しきりに練習していたのは、おそらく「禁じられた遊び」というやつであろう。

ときに激しく音を出されたものだから、吾輩の目から火が出た。どこに目があるのか、と言われても、説明できぬ。

もっとも、その人間について、まったく記憶がない。あくまでも、吾輩の想像の域を超えぬ。

ふと気がついてみると、吾輩は、その人間から、大阪の「リサイクルショップ」なるものに売り飛ばされていた。いまから10年あまりまえのことだ。

ショーウィンドーというらしいが、そこに、吾輩は置かれた。人間たちが目の前をとおる。

吾輩は、さらしものということをされているのだろう。

吾輩は、ひとりのメガネをかけた男を見るようになった。この男は、毎日、朝、吾輩の前をとおった。どこに行くのか、とんと見当がつかぬ。なんでも、これが、人間がおこなう「通勤」というものらしいと、あとで知った。

吾輩は、この男がおとるたびに、おーい、おーい、と声をかけた。いいや、声をかけたつもりになった。もちろん、吾輩は、音は出せるが、人間の言葉はつかえぬ。もとい、吾輩だけでは音も出せぬ。

あるときから、男は、吾輩の前をとおるたびに、こちらを見るようになった。あとで聞いたのだが、男は、吾輩が呼んでいる、と思ったらしい。

そして、男は、吾輩を2万円ほどで買った。

町工場というものに連れて行かれた。そして、ロッカーというものの中に入れられた。男は、針金ハンガーというやつで、吾輩をぶら下げるものを器用にこしらえていた。

この男が、吾輩の主人である。名は、和泉康夫、よわい、つまり年齢は、いま50歳。吾輩と出会ったところは30代後半だった。種族は、町工場の経営者。忍耐強くて、ロマンを追い、純情で、感激屋で、泣き虫で。その種族たちの行動は、木でできた吾輩がもらい泣きしてしまうほどだ。

主人は、大阪市鶴見区にある創業60年あまりの町工場「新日本テック」の3代目である。

この町工場は、主人の祖父が創業したそうだ。ジッパーともファスナーとも呼ばれるものをつくるメーカーだったが、2代目である父上が、金属部品をつくる会社に形を変えた。こういうことを、日本では、「第二の創業」というらしい。

人間は、ちよくせつ顔を合わせなくても会話をする、という芸当をする。そのときにつかう携帯電話などの中に組み込まれる電子部品。

人間は、思い出を切り取って保存する、という芸当をする。そのときにつかうカメラなるものの中にあるレンズ。

人間は、けがや病を治すため、身体を切ったり、つなげたり、という芸当をする。そのときにつかう医療機器をつくるための金型。

吾輩の主人と70人あまりの従業員諸君は、それらをつくっている。

主人は、昼休みになると、吾輩をロッカーから取りだし、奏ではじめる。

本日は、何を奏でるだろうか。右手も左手も、たえまなく動かす、でも物静かな音楽だ。かつて西欧というところに、バッハという男がいたと聞く。音楽家という種族らしいが、その男が作曲した無伴奏チェロ組曲一番、「プレリュード」なる曲だ。

主人は、気持ち良さそうに吾輩を奏でている。昼食を食べたからだろう、目が、とろーんとしてきた。吾輩を奏でる指が止まった。昼寝の時間である。

◇

吾輩と出会うまでの主人、和泉康夫について、少々語っておく。もちろん、吾輩が知っているかぎりのことしか語ることができないのだけれど。

主人は、奈良県の生駒市に生まれた。プラモデルなるものを好み、西欧のドイツなる国のタイガー戦車、メッサーシュミットの戦闘機などを、無我夢中でつくった。

中高一貫の進学校に入った。地理歴史研究会と英語研究会なるものに所属した。英語研究会は、ESSと呼ぶらしいな。だが、学校生活を謳歌(おうか)したとは、お世辞にも思えない。主人が自分で言うのだから、間違いない。

主人は英語をまなんだ。だが、しゃべることはできても、英米うまれの本物が言っていることは、なかなか聞き取れぬ。「しよせん、英語はコミュニケーションの道具だ」。そう達観した主人は、考えた。しっかりとした物をつくることも、コミュニケーションの方法だ、と。美しいもの、デザインの優れたものをつくって人に感動してもらうことが、人間と人間の交流を図るにふさわしき手段だ、と。さすが、町工場の息子である。

主人は、京都帝国大学、もとい、京都大学の工学部に進学した。3回生の夏休み、交換留学生として、ドイツの工場へおもむく。あこがれのタイガー戦車を産んだ国である、志願、という言葉がびったりくる。

やすりがけ、旋盤、フライス、などと呼ばれるものづくりの基本作業を、マイスターに学んだ。マイスターとは、実力を認められた職人のこと、吾輩をつくったギターづくりたちと同じ人種である。ちなみに、主人を指導したマイスターは、元メッサーシュミット戦闘機のパイロットだった。人間の世界は、不思議な因果がめぐりにめぐる、たいそう面白いところだ。

主人は、同じ職場にいた20数人の名前を、すべて覚えた。休憩時間、主人は、ひとりひとりに、あなたの名前はシュミット、きみの名前はカーン、などと言いあてた。みんなから拍手を浴び、がっちり心をつかんだ。

ちなみに主人は、むかしもいまでも、コミュニケーションがいちばん大切だ、と思っている。

京大を卒業し、有名なる総合電機メーカーに入社した。生産技術研究所に配属され、産業機器の設計にたずさわった。主人いわく、設計は美学であり、哲学だそう。シンプルでスモールでサイレントでなければならぬのだ。

パリのエッフェル塔、主人あこがれのタイガー戦車……。それら、歴史的で、本当に素晴らしいものを見て、そのメカニズムを知り尽くすことで、設計の美学、哲学が完成していくのだとか。

主人は、会社で将来を囑望された。何万人もいる社員のなかから選ばれた200人の中に入り、その会社の将来を考えさせられた。「きみは管理職になるのだから」と研修が増えていったが、主人は、ガシガシ設計をつづけ、戦車のような機械をたくさんつくりたかった。

そのころ、主人の父上が過労でたおれた。主人は、かなり悩んだすえ、ものづくりでは同じ、これも人生、と思い定めた。5年あまりで会社を去り、家業へ。28歳だった。

◇

吾輩と主人が会うのは、まだまだ先の話である。おや、昼寝をしていた主人が、目を覚ました。おもむろに、吾輩を奏ではじめる。

次の曲は、「ボレロ」、という曲だ、フランスのラベルという人の作品だそう。先のバッハといい、音楽家という種族はたいしたもの。ときに人間を眠りに誘い、ときに人間を自己陶酔の世界に誘うのだ。主人は、ときにギタリストの押尾コータローになりきる。

では、話のつづきだ。

◇

家業の町工場に入った主人は、ふたたび、ガシガシと機械の設計をはじめた。だが、同時に、営業も、品質管理も、ひとりで兼ねねばならない。主人は、それまでいた大企業が、いかに恵まれたものであったかを、身をもって知った。

そして、主人に災いがふりかかる。

1994年、主人が家業にはいって2年半がたったころだった。みんなで、金曜日から1泊2日の社員旅行にいった。行き先は伊勢神宮。主人は土曜に自宅にもどった。

日曜の午前2時ごろであった。リリーン、リリーンと電話がなった。寝ぼけ眼で、主人は受話器をとる。工場ちかくの酒屋のおばちゃんからだった。

「和泉さん、あんたの会社、燃えてるで」

「おばちゃん、こんな時間に何いうてんねん。伊勢神宮にお参りした晩やで。工場には誰もいてへんねんから、燃えるわけないやん」

「ほんまに火事や、あんた、はよ来いや」

主人は車で向かった。工場ちかくの夜空は、紅蓮（ぐれん）の炎が立っていた。消防車にパトカー。主人は、消防士にいった。

「この工場のもんです。入れてください」

入れてくれようとしたとき、ものすごい音とともに、炎が噴き出した。いわゆる、バックドラフトという現象だ。

主人は、うめいた。「おおおお、なんでこんなことになんねん！」

消防士たちの懸命な消火活動で、明け方、建物の火は消えた。焼けたのは、2階の倉庫の部分だけだったのは、不幸中の幸いなり。

知らせを受けた従業員たちが、かけつけてきた。水びたしの中を、みんなで片づけた。

ところで、なぜ、だれもいないはずの工場が燃えたのか。

じつは、主人たちは、伊勢に行くまえ、工場の門に、こんな貼り紙をしていた。

「社員研修のため、お休みをいただきます」

思えば、これがいけなかった。何者かが窓ガラスを割って侵入し、空き缶を灰皿にしてたばこを吸っていた。その火の不始末が原因だったらしい。

電気配管がはりめぐらされ、熱がこもっていた。また出火するかもしれぬ。主人が夜通し、番をすることになった。停電で真っ暗な工場の真ん中に長いすをおき、そこで眠る。2時間おきに目覚ましをかけ、懐中電灯で工場を見回った。主人の全身を、悔しさと情けなさがおおった。

何度目かの見回りがおわり、長いすで眠っていた。だれかの声をした気がして、主人は目覚めた。「和泉さん、こんばんわー」。たしかに、入り口にだれかいる。起きだしてみると、火事を知らせてくれた酒屋のおばちゃんが立っていた、にっこり笑って。

「あんた、大丈夫やったかあ。えらいことになったなあ。けど、無事でよかったなあ。食欲がなくて、何も食べられへんかもしれんけど、よかったら、これ、お食べ」

おばちゃんは、おにぎりを持ってきてくれたのだ。中に梅干し、外はのりで包んだおにぎり、いっぱいのおかずを添えて。

「おばちゃん、えらいありがとう。おかげさんで、大丈夫やから。ありがたくいただきます」

おばちゃんが帰ったあと、主人は、月明かりのなか、青白くみえるおにぎりを、両手でつつんで食べた。うまい。主人の目は、涙であふれた。

〈おばちゃん、おおきに。こーんなことで、おれは負けへん。ぜったいに負けへん。おれについてきてくれる人は、みんな温かい飯が食えるように、しっかり守ったるんや〉

主人は、心に誓った、覚悟を決めた。

しかし、それでうまくいくほど、世の中は甘くない。そして、主人がギターの道へと導かれていくのだが……。つづきは後編にて。（敬称略）

◇

中島隆（なかじま・たかし） 朝日新聞編集委員。福岡県生まれ。鹿児島支局をふりだしに、経済部記者、名古屋報道センター次長、東京生活部次長、「ニッポン人脈記」チームなどをへて、2012年4月から現職。著書に「魂の中小企業」（朝日新聞出版）、近著に「女性社員にまかせたら、ヒット商品できちゃった」（あさ出版）。就活生向けの朝日学情ナビでコラム「輝く中小企業を探して」を連載中